

[活動報告]

No.21-60 講演会 技術と社会の関連をめぐって:過去から未来を訪ねる 特別講演3「宮古上布の伝統とその魅力」

No.21-60 講演会 技術と社会の関連をめぐって:過去から未来を訪ねる
特別講演3「宮古上布の伝統とその魅力」 報告

琉球大学
岡本牧子

宮古島には宮古上布という600年間引き継がれた伝統の織物がある。苧麻(ちょま)というイラクサ科の麻の繊維で作った糸で織られる麻織物で、琉球藍で染められた糸は職人の高度な技によって十字縞を織り成す。宮古上布の特徴は細い糸で織られる精緻な縞模様とロウを引いたような光沢のある滑らかな風合いである(図1)。苧麻の繊維を1本1本手で裂いて作った細い糸で作られるため、通気性に富んでいて、三代物と呼ばれるほど丈夫で長持ちする。日本の四大上布の一つに数えられ、藍染の麻織物の最高級品として重要無形文化財、伝統的工芸品に指定されている。今回は長年宮古上布の織の技術継承に尽力されている宮古織物事業協同組合専務理事の神里佐千子氏に「宮古上布の伝統とその魅力」と題してご講演をいただいた。

神里氏は地元宮古島の出身で、自身も宮古織物事業協同組合の研修生を経て技術の継承に携わっている。神里氏のイメージする苧麻の糸はおばあ(おばあちゃん)が績む糸である。その糸はととてもとても細い。糸先を確認するのが難しい細い苧麻の繊維(生ブー)を績みながら、「おばあが績んでいた糸はもっと細い」という(図2)。細い苧麻糸は麻でありながらしわが付きにくく、光沢も出やすい。現在宮古上布として認定されるには、経糸が14よみ(1120本、1よみ80本)以上あることが条件であるが、神里氏は20よみの最高級宮古上布をめざす。細さを追求すればするほど糸車で撚りをかけるのが難しい。撚りが強すぎると、琉球藍で糸を染める工程が難しくなる。弱すぎると切れやすくなり、縞締めや製織、砧打ちの工程で大変なことになる(図3、図4)。糸の撚りかけは、宮古上布の製作工程全体に影響を及ぼす重要な工程だが、撚りのかけ具合は指先の感触で研修生へ伝えられる。経験を積むしかない技術伝承のカギを握るのは、宮古上布の産業としての確立である。

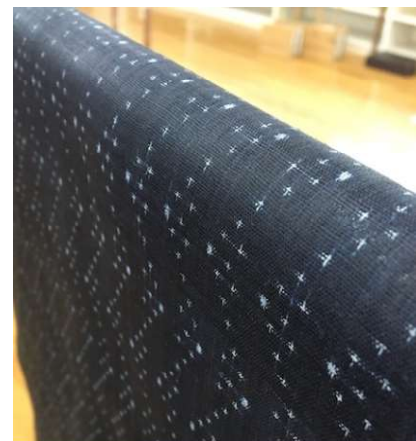


図1 十字縞が特徴の宮古上布

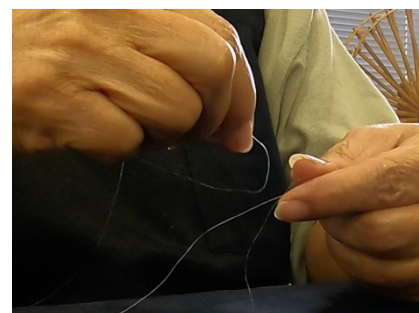


図2 糸績みの様子

宮古上布の認定条件には「琉球藍」を使うことも挙げられるが、栽培が難しい琉球藍は供給不足で現在は沖縄本島などから調達される。産業としての課題は材料だけではない。織物業界はほかの業界と比べると価格調整が不透明で、宮古上布の販売価格はかなり高値で設定されているにも関わらず、生産者達が職業として宮古上布に長く関わられる流通体制が整っていない。神里氏は宮古上布の伝統技術の継承を可能にする生産から販売の確立に向けて、現在沖縄県と一緒に活動している。一方で宮古織物事業協同組合とは別



図3 括り初めの図案と製織



図4 琉球藍での染色と砧打ち

に、糸績みの技術を島に伝承する会として「宮古苧麻績み保存会」が2000年代に結成され、宮古島には現在10から20のグループが活動している。自身も会員である神里氏は「仲間たちと楽しく糸績みをやっていきたい」と語る。実際に本講演会が開催されている間も、講演会場であった宮古島公民館の一室で保存会のあるグループが定期的に糸績み活動を行っており、宮古島のDNAが受け継がれていると感じた。

本特別公演はオンライン形式で行われ、あらかじめ録画されたインタビュー動画が放映された後、織手養成室で研修生指導している講演者へ直接質問する時間が設けられた。参加者は20名弱で、伝統技術伝承の難しさや工夫などに対する質問や宮古上布の新たな再発見に関する感想など闊達な議論が行われた。今後も地方ならではの伝統技術をトリガとした近未来の技術と社会の連関を展望する講演企画を進め、会員に貢献していきたい。

日本機械学会技術と社会部門ニュースレター: <http://www.jsme.or.jp/tsd/news/index.html>

日本機械学会

技術と社会部門ニュースレターNo.45

(C)著作権:2022 一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門